

浄土

昭和十年五月二十日 創刊（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 遷轉（特別授受認許）第三五二号
昭和四十七年二月二十五日印刷 昭和四十七年三月一日発行

第三十八卷

第三号



1972

3



—目 次—

表紙 「鎌倉大仏」松涛達文画

感じたこと二つ三つ……………	大 橋 英 正…………	(2)
知られざるハワイの秘話・悲話……………	佐 藤 治 子…………	(4)
私の「くせ」……………		(9)

藤原弘道・楠美知行・大高一美・藤堂俊章

〈彼岸会法話〉今日一彼岸……………	吉 田 定 久…………	(14)
人生清話・子守歌……………		(16)
異僧「真覚」第三回……………	柴 田 六五郎…………	(18)
浄土宗史夜話② 松虫鈴虫の悲話……………	三 田 全 信…………	(22)
仏教の手びき① 日本仏教のあゆみ……………		(26)
いかに生きるべきかく大人と若人のミゾを考える……………		(28)
「道」太秦への道……………	高 橋 良 和…………	(30)
浄土宗列祖の墨蹟をたずねて……………		(32)

語和声念



＜秩序について＞

車を走らせてみて、車にとって何よりも大切なものはブレーキだと知った。もともと走るように造られたものだから、車を走らせることは容易なことであるが、問題はどうかやってそれを止めるか、ということである。もし車が止まらなくなったら、その車は絶対に使いものにならない。エンジンが故障を起こしても、直接他人に害を与えることはないが、ブレーキに故障を生じたら、車はたちまち人殺しの道具となる。つまり車に關していえば、それを止めるということが根本的に必要な秩序である。運転する人について云えば、他人に危害を与えない、迷惑を及ぼさないということが基本的な秩序である。

社会の動きも同様で、一定の秩序にしたがつてまろやかに動いているときは、個人生活も安定感がある。しかし社会の秩序がみだれてくると、直接關係のない個人までが不安を感じる。大学の一部の過激な学生騒動が相次いで起こってくると、大学とは何の關係のない人たちまでも一種の不安を感じるのである。ましてこれから大学へ進学しようとする青年男女の気持ちはさらに大きく動揺しているにちがいない。

人間が日常生活のうえで秩序を欲するのは自然の感情である。一部の進歩的と称する人たちが、その秩序に批判を加えることは悪いとはいえない。批判されることによって秩序は徐々に変わってゆくのである。それを急変させることはおのずから非難があるだらうし、社会は急変にはついてゆけない。それを強いて急変させるためには暴力、または暴力に近い権力が必要となる。社会はどのような革命も欲してはいないし、秩序の改変は徐々に進むのが自然であろう。

国家には国家機構、法秩序があり、社会には社会秩序、社会機構の道德的秩序がある。個人には個人的秩序があり、個人的秩序とは個人の道德であり自律心である。すべて秩序は、個人がそれをうけとり実行するときには、自制心のようなかたちをとる。自動車のブレーキと同じである。ブレーキとは自分で自分を引きとどめる作用である。

(宮林)



感じたこと二つ三つ

大橋 英 正

(東京・芝学園中・高等学校校長)

三月の声を聞くと、私どもが、まず思いを馳せるのは「ひがん」である。春分の日は、「自然をたたえ、生物をいつくしむ」国民祝日の一日となっている。全国緑化運動が一齐に展開されるのも三月早々であるが、冬来りなば春遠からじ、長い越冬を終えて、なごやかな春、希望に胸をふくらませるのもこの頃からである。

脱工業化社会とまで言われている昨今、大気汚染、河川や海の汚濁、騒音、地盤沈下、産業廃棄物の処理の問題、更には自然土壌の汚染と言った公害、また日照権の問題等、さまざまな困難な問題が提起されている。これは一つには、人間が自然に対して懐き続けてきた誤解——（自然が無限であり、代価を払わずに恩恵をうけられる）——によるものである。自然の還元シス

テムは極めて精密で遠大であるにもかかわらず、人工システムが還元のパターンを無視した為に、人間が自然からきびしく懲戒をうけているのが現状ではなからうか。

また、別の面からではあるが、一つの例をあげてみよう。デパートで服地を買おうとする。蛍光灯では心もとないとも言うのであろうか、または乱反射のために固有の色が見極めにくいためでもあるか。その品物を持って日光にあててみる。「色彩表」などで、「青はこれ、赤はそれ」と教えられるが、そもそも絶対の青・恒常な赤といったものが日常生活の中で存在するのだろうか。同じ景色の色あいにも、昼夜明暮にめいめいの色調を感じ、四季それぞれの趣としてうけとめる。考えてみると、色相・明度・彩度の配合いか

んにより、私どもの視覚に色として感ずるものと、色と言えるかどうかというものがあるように思えてならない。

日々の生活をふりかえってみると、慌しい明け暮れに、仕事に追われながらも、なにかそこに確固としたものがあり、それに催されて、昨日からきょう、きょうから明日へと、その中心を貫く唯一絶対のものが流動しているように思いがちであるが、果してそう言うものなのだろうか。理屈の上では、必ずしもそうではないと承知しながらも、既定の事実の如く、一月の次は二月が訪れ、春のあとには夏が来るものと信じて疑わず生活のリズムを形作っている。

自然の恩恵に対しての人間の安易な考え方、色彩に例をとった不安定性、最後に不安定の中のかりそめの安定と言ったことを思い出し感ずるままに述べてみた。

ある事象について、それに不可欠の因子を悉く網羅することが、人間世界において可能なことであろうか。人柄がよいとか悪いとか、一体なにをさして人柄と言い、なにを基準として、人格のよいあい、行為の是非を論ずることができるのか。なにが人格のすべての因子であるか。神仏ならぬ身のわれわれには、絶対

に言い尽すことはできないであろう。

仏教では、いかに死に処するかということが問題とされた。言いかえると、いかに生くべきかと言う問題につながる。「生死」に思いをいたさねば、死のみでは一面的であり、生のみでも平面的なとらえ方に終ってしまふ。

自分の非力についての内省が深刻であり、生き方についての問題解決の努力が強まればそれだけ、悲・智・円満の「アミダ仏」の大願業力にすがる気持は真剣であり、切実であると言えよう。「ひがん」を六度(めぐみ・つつしみ・しのび・はげみ・しづけさ・ちえ)満行の修養週間とうけとめること、祖先の供養・墓参もさることながら、個人の完成への精進のみにとどまらず、自然をたたえ、生物をいつくしむという、個的・社会的宇宙的な視野と共同社会の一員としての自覚のもと、自分に与えられた力を、幾分たりとも、育成してくれた自然と社会に還元回向する、いや回向さして頂く心構えが大切ではなからうか。もの・人すべてが生かし生かされる、仏凡一体、往還一如、進展やまざる念仏の本来の生活こそが、信行策励の第一歩であり、最終の目標でもあらう。



〈無名戦士の墓前の一行〉

浄土宗寺庭婦人会長

佐藤 治子

知られざるハワイの秘話・悲話

昨年の十二月末、ハワイ浄土宗寺庭婦人会第二回総会に出席のため、総本山知恩院鶴岡隆支執事長を団長とする、私たち寺庭婦人会および華頂婦人会の一行十六名は、日本を飛び立ったのですが、本日はこの旅先でのいろいろな話の中で感じたこともありますので、皆様にお分ちし一緒に喜び、共に悲しんでいただければと思います。

最近つくづく考えるのですが、この歳になるまでいろいろなことがありました。それは様々なご縁によって結ばれております。仏縁のありがたさ、仏縁の恐しさと申しますか、自分の思わぬ方向へむかっていることが度々あった訳でございます。この度のハワイ行も後で話しますように、人の縁によってたつということが、しみじみと感じられたのです。

さて、マウイ島カフルイ浄土院におけるこの度の第二回総会には、ハワイ全島の浄土宗寺院婦人、および信徒の方々三二〇名程が出席されましたが、私たちも本土から初めてその席に参加いたしました。そして「拝む心で手をつなごう」というテーマがもたれました。この大会のスピーチで、私は次のような話しをいたしました。

「この度のハワイ行がほぼ内定した昨年の夏、たまたまテレビでハワイ教育委員会主催の日本訪問団の日系の学生たちの座談会を拝見いたしました。その折、学生たちがこうして日本の土を踏めましたのも、長年の父母の苦勞あつての上のことであり、私たちの今の気持は両親への感謝の念でいっぱいであります、といっておられました」。

と、このテレビでの様子を最初に話し、非常に感激したことを述べたところ、会場に來られた移民の方々、自分たちの苦勞を、立派になった子供や孫たちが日本において、このように話してくれたことについて、そして今、その様子を日本の人が話してくれたということで、とても感動されたようでした。

そして私は、「私たち寺院婦人は經典にみられる菩薩行を實踐しなければなりません。喜びも悲しみも、共に分か合うことが大切であります」と、行きの日航機内のでき事を話

しました。旅立つまで中国ブロックの寺院婦人研修会への出席、そして雑事に追れた私は、疲れたまま機上の人となったため、六時間あまりの飛行中なかなか寝つけませんでした。たまたま通りかかったスチュワデスが、私の様子を察知し、後方の席に仮りのベットを作りましたので、そちらでやすみくださいと、告げてくれたのです。おかげさまで私は、疲れた身体を休めることができました。翌早朝目覚めると、よくねむれましたかと、昨夜のスチュワデスがまいました。そして私が肩をいからしている様を見て、肩をもみました。と、ニコニコしながらもみでしたのです。最近の日航機は日本茶をくれたり、とてもサービスがよろしいですねと、いいますと、それを聞いた他のスチュワデスが、奥様は日本茶がそれほど好きですかと、お茶と梅干を持って来てくれたのです。私は感謝の気持ちがいっぱい、何かしてあげねばと、持ち合せの大仏のお守りをさしあげようと思いました。しかし、一つのお守りを二人にあげる訳にはまいりません。パーサーに相談し、肩をもんでくれたスチュワデスが、国際線に勤めて日が浅いそうですので、その前途を考えその方にあげたいと申しますと、パーサーの方は、二人共私の部下です、お目にためていただけてありがとうございます。折をみてかならず渡ししょう、といってくれたのです。

スピーチの際、あまりむづかしい話しはしないようにと注意を受けていましたので、この日航機内のでき事を話したのですが、あちらの方々も感激のうちに聞いてくれたようです。そして成功裡のうちにこの大会を終了し、各島の教会・寺院を参詣させていただきましたが、どちらも美しいアンセリウムで飾られた内陣で、あたかも極楽の花園を思わせ、そして婦人方の暖かい歓待のもと、とてもたのしい一週間の旅となったのです。

さて、私は出発の直前、愛知県豊田市の一寺院婦人の方より一通の速達便をいただきました。それは私がハワイへ行くことを聞き、誠に申し訳ないが二十五年前別れた知人を探してきてほしいということなのです。これこそ寺院婦人のすべき仕事よ、という訳で同封された「たずね人」と大きく書れた身分や特徴が書かれ、そして別れる前に互いに持っていたらしい写真のはつであるチラシを二十二枚コピーして行きました。

ホノルルへ着くと藤花ハワイ開教区総長はじめ多くの方々が出迎えて下さいましたが、私は会う人ごとにそのチラシを見せ、機会があればお探し下さいとお願ひしたのです。ある人はラジオで流しましょうともいつてくれました。その後、私たちは日程通りハワイ各地を訪れたのですが、その先々で

この「たずね人」のことをたのみました。そして最後に訪問したのがババイヤの一番おいしいといわれているカワイ島です。

そこで私たちは二つある開教寺院を参詣し、そのあと、小型グラントキャンニオンといわれている風光明媚な所で、土地の婦人会の方々と一緒に持っていたお弁当を食べるということで、皆様の車に分乗して出かけたのです。そして目的地に着いた折、このカワイ島で「たずね人」のことをお頼みすることを忘れていたことに気づき、たまたま居合せた北島開教師夫人にいますと、「あー、その方ならよく知っております」と、いとも簡単におっしゃるではありませんか、私は全身から血が引いていくような気がし、張りつめていた気が一瞬にして涙となって出てまいりました。

「たずね人」は、今は新田という姓に変わり、日本語の先生をしている由、私は北島夫人が電話で所在を確認し、飛行場へ行く途中案内して下さることを聞いた時、何ともいえない氣持がよぎるのを感じとらぬ訳にはまいりませんでした。

さて話しはとびますが、北島夫人が「たずね人」のもとへご案内下さる道すがらのことです。坂を下り海岸線を走っていた折、「奥さまあの島こそんじゅ」といわれました。見ますと、江の島よりやや大きい位の島が目にとまりました。そ



＜1968年建立の同胞先亡慰霊塔にて＞

して、夫人はその小島をめぐる悲話をもの静かに話してくださいました。

今次世界大戦のもととなった真珠湾攻撃に参加した、日本兵の飛行機がその小島に不時着したのです。居合せた原田という人は、真珠湾攻撃のことも知らず、その傷ついた日本兵を手あつく

看護したので、その後、日米開戦を知った、原住民は、この島にあやしい者が不時着し秘んでいるというので、この日本兵を探しはじめたのです。これを聞いた二人、捕われることは恥であると思う日本兵、かくまったという

ことに対する非難から逃れようと思う原田、この二人の方は自害されたのです。カワイ島に残る原田さんのお子さんは、夢に「父ちゃんは死んだ」といい、奥さんは「そんなことはない、父ちゃんはあの小島にいるんだよ」といつて聞かせましたが、翌朝自害されたことを聞き、それが正夢となってしまうのです。そして戦時中、在ハワイの日本人は要意人物として、絶えず監視のもとにおかれたが、原田夫人は、更に過酷な労務に従事させられたといひます。

この悲話を聞いた私は、今原田夫人が北島さんの開教寺院にねむる亡き主人のお墓を守りつつ、ご近所で生活されていることを聞き、旅先故何もできないが、せめてもお花料を託せざるを得ない気持ちでいっぱいでありました。

やがて車は、この話しが終るのを待っていたかのように「たずね人」新田さんの店先に着いたのです。私が案じていた通り、新田さんは私が友達であると思ひ込んで飛び出して来たところが、見知らぬ私が「あなたが新田さんですか」といったので、いささか落胆した様子でした。しかし、私が訪ねた経緯を話し、写真を手渡しますと、大変なつかしさがあっておられました。私は豊田の住所を教え、そちらの住所を聞き、そして一行が待つ空港へ急いだのです。

この旅先では大変忙しい毎日でしたので、家へも葉書は出

しませんでしたがこのことは別とばかりに、急ぎペンを走らせ住所をお教えいたしました。

私が帰国しました後、その奥さまから長文の礼状が届けられておりましたが、その礼状には学ばされることが書いてございました。

「もし会長さんがハワイへいらっしやらなかったならば……もし寺院の方々がこの度の旅行に参加されなかったならば……もし私が寺へ嫁がなかったならば……もし私が会長さんに京都でお会いしていなかったならば……この度の結果は得られませんでした。本当にお仏縁のありがたさを感じました」

という涙ながらの礼状であつたのです。本当にそうなのだ、私がふつとした縁で、何の努力もなくいかに偶然とはいえこの二十数年間音信不通であつたお二人の縁を結ばせていただけたということは、仏さまのお導きであり、何かの糸であやつられたような気がいたしましたのであります。

こうした因縁にみちた話しは私たちの身近かにも多くあると思います、先の方原田さんの一件も、新田さんを探したずねた結果得られたものであります。その後、ハワイを訪れる自衛隊の代表がその度ごとに原田夫人を慰問し、墓地へ参詣されると聞き、胸靜まるものを覚えたのであります。

ハワイにはこれに類する知らされる話しが大層あるようです。私はハワイでの日程を終えた後、一行と別れアメリカ本土に渡り、帰途再びハワイに寄りました。その折、藤花総長夫妻のご案内をいただき二つの墓地を参詣する機会を得ました。一つは当地の人たちが「元年もの」と称している移民草分けの同胞がねむるモイリリの墓地です。そこには一九六八年移民百年祭を記念して、佐藤首相の筆による慰霊碑が建立され、常陸宮様をお迎えして盛大に除幕式が行なわれた由、その碑を中心にきれいに整備されておりました。他の一つは明治初年、日本海軍の竜譲という船の乗組員のうち、航海中たおれた十六名を埋葬したマキキ墓地です。こゝも草むしていたのを整備し、昨年初めて日米合同の慰霊祭が行なわれたということでした。

私は「こうした墓地は私たちがお参りしなければなりませんね」と、ハワイを訪れる日本人には是非足をほこびお参りしていただければと思いつつ再び参詣する機会を与えてくれたことに感謝の意を表したのであります。

こうしたこの度のハワイ旅行は、数々のエピソードを交えた大変たのしい、また大変考えさせられる旅行でもありましたが、そのつなぎ目ともなったご縁、仏縁ということに感謝しつつ終らせていただきます。

(文責・編集部)



私の『くせ』

なくて七くせ

藤原弘道

(東山学園長)
吉水学園

人にはなくせ七くせといって、いろんななくせがあります。ご多分にもれず、私にもたくさん悪いくせがあつて、矯正しようと心がけながらも、なかなかやめられそうにありません。

第一には歩きかたですが、上半身を前にかがめ、首で調子をとりながら、内股に歩きます。いかにも「女らしくて、格好がわるい」と、今は亡き母からよく注意をうけました。先年も学園の記念映画に写された自分の歩

姿をみて、本当にそのとおりだと知ったのですが、改まりそうにもありません。人は私のことをキリンと言います。それはただ私の長身瘦軀に由来するだけでなく、私の歩く姿からでたニックネームであります。それがついにトレードマークになってしまい、学園の幼稚園入口にモザイクのキリンがつくられ、園児の迎え、送りを私にかわってやってくれています。癖もここまで発展するとは思いがけないことであります。

第二に、京都生れの私として京都弁まるだしでお話するのは当然のことですが、一を聞いて百をしやべる勇しさを持っています。話に花が咲くころともなりますと、舌で唇をペロペロとなめて、すべりをよくする癖があります。第三にしゃべるだけでなく、ことば使いが悪いので、時折あとで、ひやつとすることがあり、大いに反省させられることがあります。このような次第ですから、さる著明な悪舌評論家で、私の姓名と三字まで同じ人と間違えた宛名の書かれた手紙をうけ取らされるの

も、いたし方のないことと苦笑しています。気はいたって優しいのですが、時折きびしい言葉をはいて、いかにも心臓の強い男のように誤解されることもあります。

第四に、人なみ以上に人つきあいがいよいこともあって、口の悪い友人は、私のことを人みしりせぬ男であると評し、私の癖の一つに数えてくれます。第五に、なにごとでも頼まれると辞りきれない性分があつて、つまらぬことまで世話をして損をすることもあり、逆に人様から喜んでいただくこともあります。第六に、一杯頂くとつい陽気になりがちで、いかにも酒好きで、酒豪のように誤解されるのですが、本当は酒つきあいは、あまり好きな方ではないのです。最後に、せっかちでこうと思いつめると即時断行しないと気がすまない癖があつて、そのためワンマンのそしりを受けることもあります。しかし私は、どう頑張ってもワンマンになりきれない弱い、気のやさしい人柄なのであります。

ともかく脚下照顧して、改めるべきを改めなければなりません。馬齢をかさね枯れゆくこのころになつても改まらないのが、なくて七くせであります。お申し出のとおり、あまりにも素直に綴ってしまったためか、老顔のうす赤く染るのを感じています。

楠 美 知 行

(大本山増上寺財務部長
青森市正覚寺住職)

誰人だって「くせ」のない人はない筈である。然しこの「くせ」をよく意識している人と然らざる人の二つあると思うが、私はむしろ後者に属し、強いて挙げるとすれば頼まれたことは出来るだけお役に立ちたい。これが私の「くせ」かも知れない。妻が側にいて何か引きうけると「あなた又引き受けたの」すぐ一言つけられる。けれどその仕事の中に何か収穫があればそれを妻に知らせ、これも仕事のお陰だよ、と言つては仕事を続けていく。

保護司を拝命してから二十年位になるが機関誌に「更生保護」があり月刊誌として配布されて之を読むことが楽しみの一つである。一人の気毒な人間を更生の為のよき機関誌であるが、この中に、

保護司われ約束なれば少年の家を訪ふなり雪のゆふべ

これは昨年中歌会始めに、御題「家」にちなんで、

保護司の一人が詠進され、見事入選された歌で、歌としても大変立派であり、保護司としての責任感と役割に徹し、少年との約束を重んじ、たとえ雪が降っても、約束は守らねばならない積極的な心に強うたれた歌である。世の人々、仕事の如何を問わずかくありたいものと自策自勵しているもので保護司の一人として意を強くした次第である。

次にロータリークラブの会員として今日に至っているが、奉仕の理想を看板にして活躍していることは何かしら宗教と相通するものがありロータリーの発展に強い愛情を捧げている人である。之にも亦月刊誌「ロータリーの友」があるが、これ又私の愛読書である。今日自動車が増加と事故も亦上昇の一途を辿っているがたまたまこの月刊誌に心温る記事があったので紹介したいと思う。

クラブの例会に出席のため、一会員が京都駅から都ホテル迄車にのったが若い運転手は「ハイ」と返事をし下車のとき「ありがとう」と言った。感じがよかったので席上隣合わせた人に「京都のタクシーはマナーがいいですね」と話した。隣の人は「僕はタクシーに乗りこむなり運転手に向って、ありがとう運転手さん」と声をかけることにしているとのことである。この言をいってから

世間話を始めている。とにかくタクシーに乗るといふことは、車に生命をあずけることであるから、運転手に愉快な気分で作ってもらわないとあぶないから、とこのような記事があったが溜飲の下のような話である。タクシー運転手の無応答や無愛想はどこでも話題になり更には乗車拒否や、時にはメーターに関係なく乗車料金を高く請求さるる等の今日、いきなりありがとう、この一言は誠に心温る思いで一杯である。

人間不在とか人間失格とかいう言葉が今日頻りに使われているが誠に残念な表現である。頼まれた仕事は出来るだけ協力したいことが私の「くせ」だとすれば、この「くせ」を通してこの社会を住みよい明るい社会にしたということが私の大きな念願である。

大 高 一 美

(横浜市金沢区在住)

「なくて七クセ」とよくいわれますが、自分では当たり前と思っていることでも、他の人から見れば、クセと見られる。そうしたクセはどのような人にもあるもので

す。

この度の「私のクセ」という題をいただきました時、私のクセは何であるのか、瞬間的には浮んでまいりませんでした。そこで家の人に「私のクセって何？」と聞きましところ、家中笑いだし、「お母さん、あんなに眼鏡をづりあげ、耳たぶをつかむのに！」というのです。そういわれてみますと、確かに無意識のうちにやっているようです。そして子供に「お母さんのクセは他の人にもあまり良い印象は与えないからやめるべきだよ」と、付け加えられたのです。

そこで、私はどうすればこの悪いクセをやめることができるかと、いろいろ考えましたが、良い案が浮んでまいりません。すると子供が「お母さん、耳たぶにしばらくテープでも張っておけば、つかんだ時手ざわりが違から、除々にやめられるかも知れないよ」といってくれました。そんな野蛮な方法ではと思いましたが、一応やってみることにいたしました。

外に出る時ははずしましたが、家にいる折はテープを張っていましたところ、どうでしょう、自分では恥かしい行為という意識が出はじめたためか、指を耳たぶへ運ぶ度に、何かうしろめたい気持が心をよぎるのです。そ

して、テープを張りはじめてから二週間程で、子供から「もうあまりやらなくなったね」といわれたのです。

これはクセ直しの、ほんの一例ですが、クセには良いクセと悪いクセがあると思います。良いクセはクセなりにのばすようにいたしますと、いつしか習慣となり、他の人にも良い印象を与えるようになります。中には愛嬌あるクセもありましようが、悪いクセはなるべく早い機会に直すようにいたしたいと思いますが、いかがでしょう。

藤 堂 俊 章

(和歌山県田辺市竜泉寺住職)

私の寺では初七日から始って一周忌三回忌等の法事は皆、御命日の前日夕方に私がお檀家におまいりをし、翌日の御命日にお檀家の方がお寺へおまいりになる。

私は一年間に二百日以上伝道の旅に出るから、在寺中はなかなか忙しい。したがってお檀家の法事は一日に四つも五つもあって忙しく、時間は励行である。本堂の柱時計が九時をうつと、お約束の九時にお檀家の方が一人

もおまいりなくとも、願我身淨如香炉が始っている。

もう十年程も前になると思うが、私の市内の各宗寺院の総代さんが仏教護法会という会をつくられた。名前は格好いいが、実は住職のお尻をひっぱたく会というのである。うちのご住職さまは法事や葬式はいいねいにしてくださるが、教化活動をしてくださん、だから檀家が創価学会にくわれるのだというわけである。

仏教護法会の発起の方々が私の寺の総代さんの加入の勧誘にこられたら、私の寺の総代さんはうちの方丈さんはひっぱたかなくともよく走る、これ以上ひっぱたいたらどこまで走るか分らんから、うちの寺は護法会に入らんといいた笑い話がある。

その護法会が初めての例会を私の寺で催したことがある。開会は夜七時というが、七時十五分に二人乗り、会の始まったのは八時十分であった。会が終って私に一言といわれるから、私はいった。

「開会は夜七時、というのに実際始まったのは八時十分。その間、私は座敷に坐って皆様方の世間話を一時間十分きかされた。その間、私をフリーにしてくださったら私は本を読むなり、原稿を書くなり、私は一時間十分の時間を有効に活かしたと思う。」

人生は修養の学校であるから、時間は修養のために与えられたものである。だから皆様方は私の修養の時間を盗んだ大泥棒である。お見うけしたところ皆様方はみな、地域職域における指導者の方々である。どうか、その地域において時間を励行していただきたい。あの人は寺の総代だからなあといわれるようになれば、そこから仏教は現実生活の中に蘇ってくるのではなからうかと。

その後、護法会は私の寺を会場に使わなくなった。

近世の大徳、山崎弁栄上人は五戒の中の不偷盜戒を「盗む勿れ、努力の光陰」といわれた。時間励行は私の「くせ」。お檀家の方々は「うちの方丈さんは汽車の時間と同じだ」という。

家族一同は私の「くせ」を性急(せっかち)だと評価する。時間励行はわが美徳なりという私のうぬぼれに対する鉄槌である。自分の事は自分では分らないものである。



今日——彼岸

彼岸会法話

吉田 定久

(北海道上磯郡大乘寺住職)

賛題Ⅱ「ただ本願の船に乗りて、生死の海をわたり、極楽の岸につくべきなり」

私達が生活する一年間に様々な行事がございます。其中で年二回迎えるのは「彼岸」であります。手前の岸から、向い岸に到着するとの意義からすれば「到彼岸」でありまして、彼岸はその略称ということでございます。

実は、たとえば禪宗のような自力の宗旨では、迷いを此岸、悟りを彼岸としますけれども、我宗のような他力の宗門では、娑婆を此岸、極楽を彼岸としております。

季節になりますと、全国の寺院は「彼岸詣り——法要」を勤めますが、これは聖徳太子とか、平安朝とか云う、千年余の昔から始まったものといわれております。

この伝統永い彼岸詣りの特徴と申しますと、色々ございませうが「夕日を見る」ことを、第一に挙げねばなりません。

ん。中日を挟んで前後七日としてありますのは、夕日を見る為の日程でございます、他にどのようなものを挙げましても——彼岸に関する限り——それは第二第三のものであります。

と申しますのは、元来、彼岸は自分自身の菩提——智慧——の種を蒔くことが、目的だからでございます、彼岸は反省の時とか、向上の時とかいうのも、そのことを指したのもでもあります。

ここでお話を三千年前に移して申上げますが、その頃印度の国におきまして「あじやせ」という太子が、父にあたる「びんばさら」と申す国王を殺し、続いて母にあたる「いだいけ」と申す夫人も殺そうとした事件が起きました。「いだいけ夫人」は「あじやせ」の隙を見て、お釈迦様に面会しまして「この世は地獄です、餓鬼畜生の世界です、悪人どもを見るも聞くもいやになりました、此上は阿弥陀様の極楽に行

きたいのですが」と、涙ながらにお願いするのでした。この時お釈迦様は十六通りの方法を教えられましたが、一番初めに教えたのは、夕日を見ることでした。それは太陽も西の彼方に帰って行く、月も星も鳥も西に帰るのだから、夫人も西にお帰りなさい、そこには命の短い、幸福の少ない者を、無条件で迎える阿弥陀仏の極楽があるから、と云うのでございます。

お釈迦様の深いお心は推量できませんが、夫人の散り易い、乱れ易い心を一ヶ所に安定した上で、極楽に行かそうと云うお計らいであったのでしょうか。

勿論、いだいけ夫人は、お釈迦様の温かいお手引によりまして、阿弥陀様の本願の船に乗りまして、願う極楽に生きることが出来たと云う事件は、観無量寿経に記録されてあります、観無量寿経は、浄土三部経の一部をなしている貴重なお経でございます。

而してこの観無量寿経を一千年前の日本人、私達の先祖先輩がよく読み、よく理解し消化しまして、創めて「彼岸詣り」を勤め出したのであります。

印度にもない中国にもない、日本独自の彼岸詣りを、年に二回も迎える私達は、どうあるべきでしょうか、そこは先祖と同様、厳しく自分自身を反省することでしょう。昼も夜

も、昨日も今日も、惜しい欲しい、憎い可哀の煩惱——本能——に押流されて、彼岸には到底泳ぎつけない、力ない自分に氣付いて、素直に夫人の御信仰、観無量寿経の御精神にならい、法然上人の御体験などを指針として、本願の船に乗りまして、煩惱生死の海を渡って、極楽の岸につくべきであります。

極楽即ち我宗の彼岸へ行くと云う本願の船に乗る要領ですが、唯々心に助け給え、口に南無阿弥陀仏するだけです。

又、彼岸と云えば遠い感じがしないでしょうが、然しお念仏すればその時そこが、モー彼岸です、凡夫の私達には見えませんが、阿弥陀様は念仏する人の前に、お立ち下さる約束を持っておられます、つまりお念仏は仏と一緒になんです。所謂彼岸は仏と信者とと一緒に生きて行く世界です。この信仰からいつて此岸で一緒なもの、彼岸で一緒なもの、同じと見ていいのですか。免に角、今日念仏すれば今日彼の岸に到り、毎日念仏すれば毎日彼の極楽に生きた事を意味するので、春遠からず、彼岸また——極楽も——近きにあります。唯よく

反省して唯よくお念仏したいものであります。 十念合掌

人生清話

すこし古い話であるが、音楽家の山田耕作さんにある記者が、

「先生は、失礼ですが、自殺をしようとなさったほど苦しい時代をとり越してこられたそうですね」

と問いかけると、すぎ来し方を追想するかのようになり、しばし眼を閉じておられたが、やがて当時の話をつぎのように語られた。

欧州第一次大戦当時、私はアメリカにおりました。ところが前線から帰還してくる数多くのいたいたいしい傷痍軍人の姿をみて堪えられなくなったので、この人たちに救いの手をさしのべようと思いたち楽団を組織して、各地方を巡業して、その資金募集の音楽会をつづけていました。当初なかなかの盛況で、資金もでき、大成功だったのですが、やがて戦

子守歌

争がすんでしましますと、もう全然駄目になつてしまつて多くの団員をかかえて養つてゆけなくなつてしまつたばかりか、沢山の負債さえ背負ひこんでしまつたのです。八方金策に奔走しましたがどうにもなりません。債権者にも団員にも申訳がたちませんでした。

苦しみ悩んだ揚句のはて、せつぱつまつて、「死」をもっておわびをしようと決心しました。忘れもしません。あるホテルの三階でピストルをとつて、いよいよこれで自分は死ぬのだと思うと、さまたまの思い出が私の心にわきあがります。

何げなくこの世のお別れかと思う心持からでしょうか。窓ぎわに立つて外を眺めていました。中庭の芝生に眼を移すと、その芝生の上には二、三羽の小雀が遊んでいるではありません

せんか。放心したように、雀の動きを眼をうつしていたのです。すると母雀らしいのがバツと舞いさがって参りました。チ、チ、チチとかわいっく嘴をあけて、母雀を呼びますと、母雀は口うつしに餌を与えています。親子の温い団らんの美しい情景です。その絵のような情景をみとれていますと、どこからか、

ねんねん、おころり、ねんねしな、
坊やはよい子だ、ねんねしな。

と、はつきりと日本語の子守歌が聞えてくるのです。まるで夢のようにやさしく。

おや、誰か日本人がいるのかなと、みまわしましたが、もとより誰もいません。いぶかっている私にわかったことは、この歌は、今死のうとしてゐる私の唇から、思わず流れたものでありました。「あ、子守歌だ。そうそうこの歌は、日本にいま現にいます母親が私を抱いて歌いつづけたものであった」と気がつくと、はるか太平洋を越えて、母のいとし子と思う、切なる親心が私の心に流れてきたのです。私を慈しみ育て、いまでも私をおも



いつづけている老いの身を、私をまちこがれる母の心にそむいて、かりそめにも母よりうけた生命をわがまま勝手に断つていいのだから。いかなる苦しみにも堪え道をひらき、母の心を安んじなければならぬと、はっと気づき生きたる勇気が湧いて来ました。

その後一通の手紙と小切手が、シカゴの一人夫人から届けられました。それは、私の立場に同情して激励のことばとともに小切手が封入されていたのです。

子守歌がでなかったら、その小切手を受けとらずに死んでしまっていたかも知れませんが。因縁のありがたさを感じます。

× × ×

いつまでも忘れられず心の片すみに余韻として残っている話である。親から口うつしに心の奥そこに刻まれた子守歌で、人生のおいづめられたぎりぎりの状態から救われた山田さんの心を現代人はどう受けとるであろうか。お念仏は人間の本性を覚醒させるものである。



異僧「真覚」

第三回

柴田 六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

「こりやお岩様か？血屋敷のお菊かいな」

「お岩もお菊もありやせんわ。それでも子供にしてはうまいもんやな」

子供にせがまれて一緒に来た何人かの母親達がそんなことを喋りながら『作りもん』を見て廻った。清八は独り胸を動悸つかせながら穴だらけの南瓜に火を入れた。無数の光芒が闇を走った。和ロウの芯がすっかり赤くなつて、もう消えそうもないことを確かめた彼は、風呂で吊り下げられたその南瓜を両の掌で挟み力一杯ビュッと廻した。南瓜はトタンに消えて、そこに現出したのは、オレンジ色に輝く一個の球体である。而もその投げる光芒は、人も堂も木立も、境内にあるもの一切を無数のダンダラ縞に染め上げてしまったのである。大人も子供もハッと呼吸をのんだ。

その光の縞の中で清八の歯が白く光った。

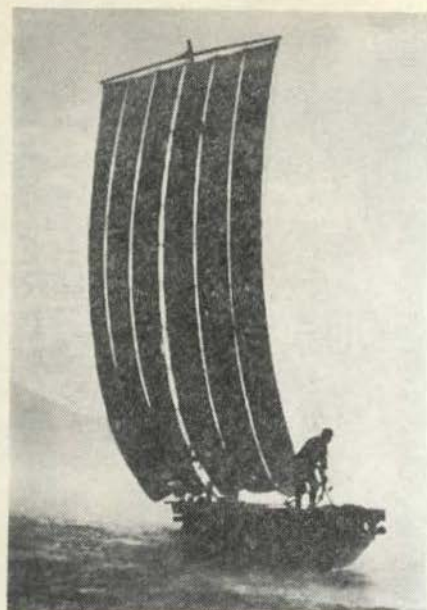
「さあ、そろそろ始めるか」と

法衣ほふえを着て出て来た和尚もビックリして足をとめた。

「ほう！これは面白い。これは傑作じゃ。清八よ、お前は天分があるぞ」

そう言うのと彼の頭に大きな温い掌てをおいた。子供達は百万辺の珠数が三十回も廻ると、そろそろ退屈して隣り同志でぶざけ出したので和尚は適当にお勤めを切りあげた。その間も南瓜のミラボールは廻転を続けた。然りが限度にくると静かに止まり、また反対に廻り出す。動行を終って静かにあげた和尚の後頭部の銭髻に、丁度その時廻転のゆるくなつた南瓜の光芒の一つがピタリと留まった。ようやく静かになった子供達がまたどつとどよめいた。

西瓜と煮豆と塩センベイ、中に小豆を入れた小さな餅が一個宛母親達の手で配られた。西瓜の一切れは、またたく間に平げて他の物は和尚の呉れたお布施の古紙に包んで大事そうに持って帰る者、一度包んだ紙包をひろげて、もそもそ食べる者、様々である。清八は、百万辺の最中に餓鬼大将の太吉が、珠数を縄跳の縄に見立てて跳び越え、母親に怒鳴られたことも、小さな割にうまかった西瓜の味も念頭には無く、只管南瓜のミラボール（勿論そんな名前も知らなければ見たこ



——琵琶湖小景——

ともなかったが）の成功に酔っていた。家に帰り床についてからも、そらミラボールは彼の脳裡で廻転を続けた。廻りつづける光の縞の中には、初めて頭を撫でてくれた和尚の笑顔があった。傑作という言葉も、天分ということの意味も解らぬままに、和尚にほめられた悦びが彼を押し包んだ。けれども頭をなでられてもニコリともしなかった、いや出来なかった自分の無愛想さを思い起すと次第に憂鬱になった。——俺は、もともと人に嫌はれるように生れついている——そんな考えが彼の心を乱した。そう思うと、今日夕飯の時のおちまの如何にも憎しげな口振りや様子。いや今日だけではない。二三年このかた、何彼につけて冷淡な養母の仕打ちが次から次へと想い出されたが、——俺はほんまの子やないで——と、自分に言いきかせて、強いて気持ちを落着かせようとした。自分分は分家の清次良の子で、此処に貰はれたということを知ってはいしたが、その理由については考えてみたこともなかった。しかしその事実を知ってからは、折々街道や田道で見かける実父の清次良と母親のおかねの姿に、どうしようもない懐しさを感じた。

「お父う」

そう呼びたかった。けれどもそれは、してはならない事のように思はれた。往来でバツリ顔を合せることもあった。

そんな時、——若しや声をかけてくれるのでは？——と胸を弾ませる清八であったが、二人共一向に気付かぬ風で、振り向きもしなかった。態と知らぬ風を粧っていたかも知れなかった。それであれば尚のこと、彼の方から「父」と呼びかけることは控えねばならなかった。夢ともうつともつかぬ想いの中で、南瓜のミラボールはくるくると廻りつづけ、その光の中に、和尚の、清次良の、おちまの顔が次々に浮かんで消え、消えては又浮かび上った。

其の日以来彼のおちまに対する気持は、急速に疎いものになっていった。そもそもおちまの態度が冷たくなって来たのは、彼が何彼につけて腹が立つ程のうまで、頭も常人以下であることを知ってからである。彼女も当初は治兵衛に提案した通り、(ゆくゆくは姉嬢にめあわせて、少々の田地も領けてやり、形ばかりでも分家させた方が、娘を嫁に出して、自分のような苦勞をさせるよりはよっぽどましだ)と考えていた。それでこそ、多少の読み書きも覚えさせる心算で新福寺の和尚の下に通わせたのである。ところが次第に鈍物性を露わして来る清八に期待を裏切られた腹立たしさが、——此の面倒な、厄介者奴が——と云う気持ちに彼女を駆りたてていった。誠に身勝手な計算であり、計画であったが、おちまはそれを露ほども身勝手とは考えず、飽くまで清八の責のよう

に考えて、彼に対する憎しみのみをつのらせた。着るものは勿論、食事の菜も、お八つも、何かにつけて他の子供達とはつきり差をつけられる訝しさ。折々やる治作との喧嘩にも決って自分の叱られる不審。そんなものが、地藏盆の夕飯の膳で洩らしたおちまの小言を思い出すと一挙に解決した。——そうや。俺が阿呆やで、おぼはん(おっ母あと呼んではいるが)俺を憎んだるのや——、単純な解答である。単純ではあるが、此の上なく苛酷な解答に彼は打ちのめされた。けれども十四歳の、而も晩生の彼には、そうした事態に処する方法など、考えようもなかった。相談する相手もなかった。益々陰氣で憶病な、丁度足音に慌てて蓋をとじる田螺のように自分独りの殻にとじこもってしまった。おちまが声をかけても、上目づかいにジッと見返すだけで、ろくに返事もしない彼のしぐさが益々彼女の不興をつのらせるばかりであった。寺小屋へ行く風で家を出た彼は寺へは行かず途をそれて、月輪の在所の南にある池の畔に行った。河川に恵まれぬ此の辺りには、灌漑用の池が無数に散在する。池は青白く濁って静まり返り、水際には葦が生い繁っている。他人眼につかぬよう、土手の芒を掻き分けてその中にゴロツト寝ころんだ。もう出揃った芒の穂をかすめて白い雲が流れ、その雲を掃くように穂がゆれた。此の無心の風光の中で、どうにもならぬ

自分の境遇を思いめぐらせた。眼を閉じると、陽に透けて真っ赤な網膜の中に廻転する南瓜のミラボールが浮かび、その光の中で、おちまの眼が白く光った。白い眼は

「見込の無いお前なんか早く出て行け」

そう言っているようである。

——そや。出て行こう。しかし一体何処へ——

彼は戸惑った。親子の名乗りも出来ぬ生家へは帰れぬ。

——丁稚。そや、丁稚に行こ。連れの太吉も、喜三郎も丁稚

に京へ行くうちこっちゃ。おまつも女中奉公に出ると聞いたし、何も俺はつかしやない——。

丁稚奉公といっても、何処へ、誰を頼って行くというあてもなく、又そこ迄は考えも及ばず只家を出るということを書いて

立っただけで彼の心は急に明るくなった。何か強い力に支

えられたかの如く彼は立ち上った。池の向う岸の芒にかくれ

て見えぬ街道のその先は、もう獲り入れも間近に色づいた稲

の穂波が湖辺にまで続いている。湖畔までは十町余りであ

る。彼は一度拾いあげた手習い用の草紙をその場に叩きつけ

ると一目散に駆け出した。陽の傾きかけた往還を突っ走る清

八を、母子連れの巡礼が驚いて振り返った。一里山の村はづ

れを右に折れると、道はゆるい降り坂。面白いように脚がは

ずんだ。大萱の外れの湖岸に着くと一挙に汗が吹き出した。

岸の石垣に緋の単衣ひとえを脱ぎすけると、彼はザブザブ水の中へ入っていった。ずんぐり丸い体つきの彼は、決して速くはなかったが、泳ぎは得意であった。沖に向って抜き手を切った。まさに比叡の山脈やまなみに落ちようとする陽の輝きが雲に照り映え、湖の面を金色に染めあげている。彼は得も言はれぬ金色の波間を何処迄も泳いで行った。

「こらっ！ こんなとこまで来て帰れんようになったらどうする。早よ帰れ。えらかったら乗せたるか」

矢橋やばしを指して帰る帆掛舟ほかけふねから怒鳴られて、彼はゆっくり引き返した。近くで見ればうす汚い舟の帆も夕陽をうけて明るく輝きつつ消えてゆく。岸へ向って泳ぎながら、彼は何度も

何度も振り返った。

表紙の解説——鎌倉大仏殿高德院——

「鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におわす夏木立かな」

与謝野晶子がかう歌った通称「鎌倉の大仏」は、正式には大成山

浄泉寺高德院といい、天平年間行基の創建と伝えられている。はじ

め源頼朝の侍女稲多野局の発願によって、浄光が勧進して木造の大

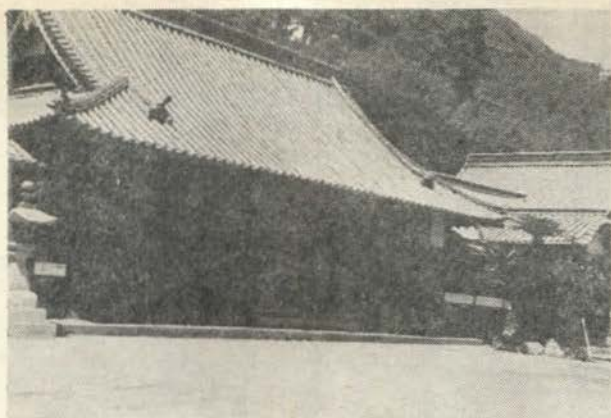
仏を造立したが、宝治二年風雨のため破壊。建長四年に再び浄光に

より、青銅仏身高十一米余の現在の太仏が造立された。造立当時建

立された太仏殿は建武二年、応安二年の二度にわたり大風で倒れ、

その度に復興されたが、明応四年の海潮で流失以来露仏となり、現

在に至っている。また正徳年間に祐天が別当坊を建立し、従来真言宗から本宗へ改宗したことにより、祐天を中興開山としている。



(生口島・光明三昧院)

松虫鈴虫の悲話

一 女性と音楽

「すまじきものは宮仕え」という言葉があるが、受難の女性小御所の女房松虫・鈴虫もこの例にもれない。平家の全盛時代に生れ故郷の水田の水不足を救うため清盛に容色を売って一郷を救った祇王祇女の悲願は有名である。これこそ女菩薩の大願に外ならない。明治大正の頃には一家の苦境を救うために苦界に身を沈める女性があった。女性が肉体美を誇るようになったのは極めて最近のことで、西洋の芸術から生れた人間美の発見である。鎌倉時代には女性が見せるといふことは夫といえどもゆるさなかった。夫に肌を見られることは恥しいと感じた。小御所の女房松虫・鈴虫(俗称)は後鳥羽上皇に仕えていた御所女房であった。ところがその頃の雰囲気を理解しないと悲話の事情が知りにくいので述べよう。後鳥羽上皇の御父君は後白河法皇である。ところが法皇は有名

な政治家でしものことまでよく御存知であった。その頃権勢を誇った平清盛さえも法皇の政治的手腕にきりきり舞させられ、たまらなくなつて福原へ都を遷そうとした。いざとなると平家の公達は京都の都を離れたがらない。その結果福原遷都はみごと失敗におわつた。後鳥羽上皇もなかなかしつかりした方で、源頼朝が政權を握るとこれを目の敵のようにして皇政復興の夢を描いておられたのである。上皇は鎌倉幕府打倒の密議をわざわざ紀州熊野まで行つて画策されていた。上皇の表向の行動は熊野神宮参詣である。宮中へは鎌倉の密偵も入つてゐるであらう。宮中の女房の動きはそれゆゑ微妙である。有名な後白河法皇の女房丹後の局などはなかなかの女政治家であつた。宮仕えのつらさを身にした女房松虫・鈴虫は、法然上人の教を説く住蓮、安樂の六時礼讃念仏に心を奪われた。住蓮・安樂は世にも稀れた美声の持主であつたといふ。住蓮は陸奥寺実遍の子で東大寺や興福寺の維那の役をつとめたことがあり、安樂は中原外記師秀の子で、俗名を師広といひ出家して安房守遵西といつた。この二人は法然上人の門弟になつてから鹿ヶ谷で六時礼讃に節をつけて又念仏を組合せたので一層有難く人人は群参したのであつた。

現代にもこのような類似現象がある。前にビートルズとかグループ・サウンズ「オックス」の若者が日本へやつて来

た。その歌謡曲に酔うて魂を奪われ失神する少女さえあつた。心理学者は人間が宗教的に熱中すると陶醉境に入ることがあるといふ。感情の鋭敏な女性には音曲の美に陶醉することも事実であらう。後鳥羽上皇が熊野神宮へ御参詣の留守中に寸暇を得た女房松虫・鈴虫は鹿ヶ谷の六時礼讃念仏会に参詣して前後の考もなく住蓮・安樂の美声に酔うて剃髪を請うて尼になつてしまつた。これは現代女子の音曲の美を追うて失神するのと同じケースであらう。しかし宮仕の女房が主家には無断で出家してしまつたといふことは重大事である。上皇の御怒もごもつともなことである。しかし前から念仏門の興隆を妬んでいた奈良興福寺の僧徒が、これを機会に煽動したから大変な事件になつた。

二 信仰と血

信仰に血を見ると火に油を注ぐような結果になる。キリスト教徒では十字軍が起り、仏教では馬鳴論師を得るために戦つたといふ。日本では一向一揆があり、その強さは武將の心胆を寒からしめたものである。住蓮と安樂が宮仕の女房を出家せしめたという理由で安樂は六条磔で、住蓮は江州馬淵で処刑された。『知恩伝』という法然上人伝では、安樂は

役人に向つて「自分は悪事をはたらいたこともない。専修念仏をするだけなのに何故処刑されねばならないのか」と反抗している。そこで役人は「その専修念仏さえやめるなら赦されるだろう」と説き聞かせた。しかし安樂は「専修念仏は私の信仰である。これをやめよとは理不尽な分である。首を切られてもやめない」と述べている。これは極めてもつともなこと、御所女房を出家させただけで死刑になるということは昔も今も筋が通らぬ。法然上人の門下に法本房行空という生臭坊主がいた。彼は貴族の女房に招かれるままに夜など宿泊した。破戒が事実だったので法然上人は、たまりかねて破門を宣告され、お上から佐渡へ島流しにされた。それでも死刑にはなっていない。その当時の貴族の女房はとかくうるさかつたようである。奇行を演じた有名な増賀上人は名利を厭つた人で、一条天皇の皇后詮子に招かれて戒師になった。昇殿して南殿の高欄に腰をかけ、大きな尻を放つて、女房達が大勢並んでいる中で「愚僧近ごろ少し腹の工合が悪くて……」といったということである。面白い話である。有徳の上人だからとがめをうけなかった。しかし住蓮・安樂の場合には専修念仏の張本と見られたために刑場の露と消えたばかりでなくその根本の罪は法然上人にあるとして四国の土佐へ遠流ということに定められた。松虫・鈴虫にしてみれば、自

分の不注意から大問題を引き起した。そのため二僧の生命が失われたばかりでなくその師法然上人さえも島流しになったのである。世を通して仏門に入ったがために血を見た自分の罪の深さに歎き悲んだであらう。法然上人は齡すでに七十である。遠流になれば生きては帰れないと覺悟され、二人の殉教者の血は上人の信火に油を注いだ。「たとい首をはねられるとも念仏を唱えることはやめぬ」と固い決意を残して四国へ旅立たれたのであった。

三 遺跡と巡礼

瀬戸内海の美しい景観の中に夢のように浮いている島がある。それは生口島で、島周六里、尾道から水中翼船や汽船も通っている。いま日光といわれる鉄成金がつくった耕三寺もここにある。その島の南岸に御寺という所があつて真言宗の光明三昧院という古い寺がある。この寺は光明房とも呼ばれ、行基菩薩が開山で、後勅願所となり本尊は重要文化財の阿弥陀仏像が安置されている。後白河法皇の皇女如念尼が、問題の女房松虫・鈴虫を連れてここに住まわれたのであるが、ある時本尊の阿弥陀如来から光明が輝いたというので、法皇が御帰依になり生口島を御寄進になったと伝える。生口

島は前は一町五村であつて、農商漁塩舟運を業とすると地誌にあるから、豊かな静で平和な島である。恐らく如念尼はお体でも弱く、このような美しい島で静養のため移り来られたのであろう。その侍女として松虫（妙智）、鈴虫（妙貞）が選ばれたようである。承元二年の頃、法然上人の遠流の赦免があつて、その帰路如念尼のお招きをうけ、海路御寺とは反対側の瀬戸田の港へ着かれたのである。瀬戸田の法然寺はその留錫の地といわれる。法然寺から光明三昧院へ直行しようとするためには千五百尺の山を越さねばならない。齡七十を越した法然上人の足では無理である。恐らく舟を利用されたに相違ない。法然上人から教をうけた三尼は帰依渴望した。寺伝によると上人は自作の木像と仏舍利を如念尼に授



（如念尼の遺髪塔）

け、庭上に白檀樹を植えられたという。この樹は現存していて天然記念物に指定されている。時が移つて慶長十七年京都黒谷金戒光明寺が焼失したので、光明三昧院の法然上人像を將軍の命によつて黒谷へ遷座せしめた。光明三昧院では代りの像を求めていた。その時その地の池田という人を泉州堺の仏師藤原源太夫という人が同時に法然上人の夢をみて、驚いて前の像と同じ大きな像を作った。ところが池田氏は新像の靈驗を怪んで胸を突いたところ、血が流れたので「血垂水の御影」と呼ぶようになったという。いかにも伝説らしい話である。寺には如念尼の遺髪をおさめた舍利塔や三尼の墓、その他忍性建立の重文十三重の塔などがある。

一般に余り知られていない法然上人の御跡である。筆者はこの寺を訪れて、その美しい風光を眺めながら、女性と音楽、信仰と血、遺跡と巡礼ということを思い浮べていた。現代音楽法要が盛になり、古く奈良の寺々が床に瓦を敷き天井を高くして音響効果を考えたなど面白いと思う。拙寺に歌謡曲で少し名を売った井上博という青年が若くして果敢なく逝つた。死後までも女性ファンが花束をかかえて墓へ訪れる。遺跡への憧れは信奉者には強い望郷であらう。仏跡ブツダガヤへ五体投池して参拝する仏教信者、キリスト教徒がエルサレムへ参詣する憧れ、遺跡と巡礼は不思議な繋がりをもつ。

手	仏
び	教
き	の

< 1 >



日本仏教のあゆみ

問 わが国に仏教が伝えられたのは、いつ頃でしょうか。

答 インドにお生まれになったお釈迦さまによって説かれた仏教が日本に伝えられたのは欽明天皇七年といわれています。西洋紀元の五三八年です。この年には、百済の聖明王の使者が仏像と経巻をもってわが国に奉納したと伝えられています。しかし、インドから中国に仏教が伝えられる場合にくたの長い年月がかかったように、わが国の場合も、朝鮮半島や中国大陸との交通によって公式の外交ルートを経て伝えられる以前に、人民から人民への伝播がおこなわれたのではないかと考えられます。

問 その辺の日本仏教の歴史についてももう少し詳しく教えてください。

答 仏教が公式に伝来したのは大和朝の時代であって、そこにつかえていた有力者の間に仏教を国家的に信ずるものか、どうかということが問題になったのです。最初は進歩的な人びとが進んでこの新しい文化をうけとめたのです。そ

して、推古天皇の世になって摂政となった聖徳太子の出現によって仏教はきわめて華やかな展開を示しました。

聖徳太子の仏教への貢献にはめざましいものがあり、太子自身は法華經義疏四卷、維摩經義疏二卷、勝鬘經義疏一卷の三經の注釈書を作られております。いわゆる三經義疏といわれるものであり、講義もされたといわれています。また、太子は奈良に法隆寺すなわち法隆學問寺をたて仏教の學問研究をすすめるとともに、いまの大阪にある四天王寺をたて、境内に敬田院、施藥院、悲田院、療病院という風に宗教文化を中心に社会事業を行いました。

また、聖徳太子という十七條憲法を忘れることができません。この憲法は儒教、仏教あるいは法家、道家の思想を基調としてつくられたものです。その第一条には「和を以て貴しと為す」とし、二条に「篤く三宝を敬え」としております。三宝とはいまでもなく、仏、法、僧の三宝ですが、そこに太子の仏教によせられた深い信念がうかがわれます。

問 奈良朝時代の仏教の特色について

答 奈良朝では仏教は次第に都から地方へと流れて、国分寺、国分尼寺がおかれることによって仏教流行の地域は大いにひろまっていったのです。それと平行して、寺院建築や工芸、美術など仏教文化の花がひらき、これまでの文化に大きな影響をあたえ、後世において飛鳥奈良文化とよばれるようにわが国の美術史にも大きな力を与えたのであります。また遣隋僧、遣唐僧などの派遣によって日本にもさまざまな宗派が入ってくるようになったのです。奈良六宗といわれる三論、法相、成実、俱舍、華嚴、律がそれでありまゝ。その当時の寺院へは仮所、社会事業、学問の場所として一手に引きうけて、常に社会生活の中心となっていたのです。

問 伝教大師や弘法大師はその時代のあとにでられたのでしょうか。

答 そうです。ちょうど都が奈良から京都へ移されたのが八世紀のおわりですね。政治を一新するために桓武天皇のときなされたのですが、この時代に、いま云われた伝教大師最澄が比叡山を中心として天台宗を開かれました。高野山においては弘法大師空海が真言宗を創立されたのです。奈良時代の六宗派は都市中心で寺院も都市に集中していたのですが、この新しい二宗は山中にその中心をおいたのです。これらが

以前の仏教に対して山家仏教とよばれるゆえんでもあります。しかし仏教が広まる一方において荘園制度の発達などによって寺院の領地が拡大され寺院の勢力は増大し、仏教が貴族中心の仏教となり、一般大衆と遊離して救済する力を失っていました。

問 その反動として鎌倉仏教が興ってくるのですか。

答 鎌倉時代に入りますと、いわゆる庶民を相手とする新しい仏教運動がはなはしく展開されるようになりました。法然上人の浄土宗、親鸞聖人の浄土真宗、日蓮上人の日蓮宗などです。これらの宗派はそれぞれ主張も、また布教の中心もちがっていますが、お念仏やお題目を唱えることを中心とした、単純平易な宗旨で、一般庶民の心に深い感銘をあたえおおいに発展していったのです。

また鎌倉時代において、新仏教のもう一つの特徴は中国にその源をもつ禪宗の勃興ということです。栄西禪師という方が開いた臨済宗と、道元禪師の開創された曹洞宗とがそれです。鎌倉にある円覚寺や建長寺、京都の南禅寺や妙心寺などはみな臨済宗です。それに対して福井県にある永平寺や、横浜の鶴見にある総持寺は曹洞宗の本山であります。



いかに生きるべきか

大人と若人のミゾを考える

よく「大人のひとは理解してくれない」と若人たちは、機会あるごとにいう。反対に「最近の若人は何を考えているのか見当がつかない、ただどうにかなるさ、という形で生きているかのように見える」と、大人はなげいている。

この両者のギャップは、はたして何に起因しているのだろうか。それには戦後の生活様式、教育その他様々な要因が考えられるが、その根本となるものは、各人に内在する人間性ではないだろうか。そこから派生する自己主張が正統のものであれば、何びとたりともそれを容認するであろう。

しかし「こんな世の中で生き甲斐などない、大がかりな体制の中に、埋没してしまうのみである」と、若人はジーンズをはき、長髪で街を闊歩する。これが一番単純な「反体制的な生き方」であると、考え実行している。また他方では「フーリングの時代だから、すべてフーリングが合えば実行するのみ、他に何もいりません」という「芸術派」も多くいることも見のがせない。そして「いま、この現在だけ楽しけ

ればよい、この先未来なんか考える必要もない」という「絶望派」もいる。

たしかに現代の若人は、幼児のときより英才教育を強いられ、名門の幼稚園からはじまりエスカレーター式に実社会へ巣立つまで、たえず他人を意識しつつ、エリート道を歩まねばならない。一度横道にそれたものは、一生うだつのあがらない生活を送らねばならないという。一見矛盾した成長期を経るのである。

このように若人側からみれば、住みにくい社会のようであるが、しかし逆にみると、今日のように若人が生活のあらゆる面で、大きな自由を持ち、好きな格好をし、自由に発言し、好き勝手なことができる時代もないであろう。

そこで若人に望みたいことは、この自由を何びとでも理解できる方向にむけて、この若さを発散させてほしいと思うのである。このだれにでも理解できるということは、一見面倒くさく、考えにくいものであり、これこそ若人のきらう一番

の要因であろうが、これ位いはやってもらわねばならない。

人はこの世に生を受け、喜怒哀楽のうちにその一生を真つ当するのであるが、その一生涯だれ一人として、各々の立場によって異るとはいえ、目標をたて、理想を持たぬものはないであろう。そしてその目標と理想を実現するために、人は生き続けるのである。

そこで、その実現のためには、ある時は自己を主張し、ある時は他に従う寛容さが必須となる。このうち、自己主張の最大の武器となるのが「ことば」である。このことばを正確に使用しているならばよい。ところが若人はそれができない、といつても過言ではない。自分のみで理解することば、仲間うちだけで通用することば、これもよいであろうが、万人に通用することばでなければ、自らその狭い思考の範囲内を守るのみになってしまうであろう。この点をふまえず、若人專用のことばを大人になげかけ「大人は理解がない」というに及んでは、もう何をかいわんやである。

他方、他人に従う寛容さという点、これはケースバイケースであると思うが、自己の狭い思考力のみでなく、絶えず他人と共に生きることを考え、尚かつその中に自己を見出す必要があると思う。

そして、この見地に立つてのち、各々の立場で、ものを自

分の力で作り出す必要がある。すでに作り出されたものを与えられるという生活は、なに不自由なものであるが故、そこには何ら不満はなくとも、決して満足いく生活とはなり得ないであろう。それは快樂主義にも似た利己的なものとなり、理想にむかつてすすむ生きようこびとは、かけはなれたものとなるに違いない。何か自分でつくり出す時は、そこにはいい知れぬよろこびが湧き、必然的に生きるよろこび、たのしみも出てくるのである。

一方、大人の側にあつても、若人が今日の生活をなすまでに至った経緯を、も一度検討し、ただサジを投げるのみでなく、そのギャップを埋めるが如くの寛容さが必要であろう。大人の中にあつても、自己の正統性のみを主張し、他の意見を一切聞きいれないひとかなりあるが、この場合にも前述のような若人への警笛と相通じる欠点である故、その人の自覚を待つよりほかはない。

ともあれ、同じ土壌に、同じ時代に生きるもの同志、たとえ年令的な開きはあつたとしても、共に理解し合える寛容の精神をもつて、各々のめざす理想・目的に向つて生きつづけられるならば、おのずとたのしみ合える、よろこび合える社会ができるであろう。

(N・H)

道

太秦への道

高橋良和

法然上人ほど迫害を受けた人は少ない。

生前のときの比叡山からの法然上人へのいろいろな面での
圧迫、そして死後においても実に古来の各宗の祖師にみられ
ないような大きな迫害があった。

それというのも、法然上人のおしえが民衆のためのもので
あったことをあらわす一つのしるしともなるものであって、
如何に念仏門が大衆を救済したかがわかることになる。

四十八巻伝には、

上人の歿後、順徳院の御宇、建保、後堀川院の御宇、貞
広、四条院の御宇、天福・延応、たびたび一向専修停止の勅
をくださる事あり、しかども、嚴制すたれやすく、興行と
どまりがたくして、遺弟の化道都鄙にあまねく、念仏の声
洋々として耳にみとり。

とあり、念仏門に対する圧迫も漸く盛んになってきたこと

をあらわしている。

そのころ法然上人の十三回忌の法要が修行される年である
貞応三年（一二二四）に、比叡山延暦寺では、この念仏門の宣
布について、いよいよ具体的に圧迫しはじめてきたのである。

そのころ上野国の並檀（なみえ）の賢者（りっし女）定照
が、法然上人の選択集に反論して、禪選択をあらわしたこと
について、法然上人の高弟隆寛禪師は願選択をあらわして、
法然上人のおしえの真実をつたえることに門弟たちが努力し
たけれど迫害はいよいよ表面化してきたようであった。

そして上人の門弟たちは、またそれぞれ配流の罪をうける
ことになり、隆寛、空阿弥陀仏、幸西ともども流罪になつて
いるし、その上、比叡山の大講堂の前では、法然上人の著述
である選択集の版木を、焼くというような事件も起きている。

その嘉禄三年（一二二七）のときである。

吉水の庵室の上人の墳墓を破壊し、その遺体をあばいて、鴨川に流すという、常識では考えられないような事件が、秘かに計画されていたのである。

このような法難はいまだいづれの祖師においてもなかったことで、法然上人の弟子たちは、この事件にどのように対処しようかということで苦心したのである。

これでは如何にお師匠さまの御遺骸を守ろうとしても仕方がない、とても力では措止することは出来ない。

門弟たちが相談した結果、ここここにいたった以上、御遺骸の無事を祈って、洛西のどこかに改葬しようということに話がまとまり、弟子の信空を中心に、その御遺骸を掘って、嵯峨に運ぶことに話が決まった。

四十八巻伝によると

六波羅密寺の標題の北条時代は、内藤盛政に命じ、延暦寺衆徒の乱行を禁制せしめた、云々。制止したが、衆徒は承知せず、なおも廟堂を破り、房舎を破壊した。とある。

嵯峨に運こんだということは、比叡山よりはかなり遠いところであるし、その上嵯峨の清涼寺は念仏門の人々の多いところであり、また近くの二尊院には定信房湛空・羅生院の念仏房もいたので、一人でも多くの弟子がいるところを求めて

安全を期したらしい。

そのとき、関東の念仏者は、法衣の上に鎧をつけ、道の警備にあたったとつたえられている。

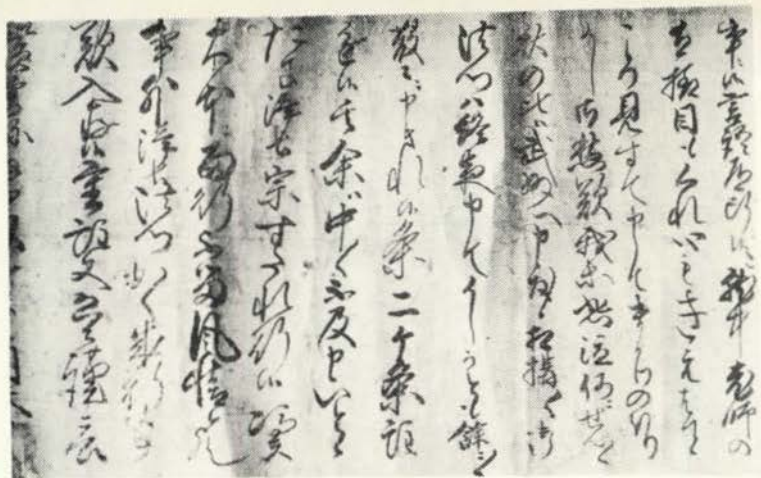
そして法然上人の御遺骸は、嵯峨の清涼寺釈迦堂に数日間安置されていたが、嘉禄三年六月二十八日に秘かに、太秦広隆寺の来迎房に移したといわれる。

来迎房というのは、太秦広隆寺の塔頭であって、円空がいた寺である。そしてこの来迎房で安貞二年正月二十五日（一二二八）まで安置されたが、この来迎房の趾が今の太秦の西光寺にあたる。

そしてこの来迎房で、上人の十七回忌をつとめ、なおも迫害がつづくために、西山の粟生野において茶毗することになった。そのときまでこの来迎房で、上人の遺骸を守ったのは当時の嵯峨門徒であるといえる。

今の西光寺は広隆寺の門より南西へ二百米のところにあたり、門を入ると「円光大師御遺跡」の石柱が目につく。

昔は藪のなかの静かな僧房であったかもしれないが、今はこの辺もすっかり変わってしまった。この西光寺には、法然上人御自作の木像があり、御本尊は法然上人の念持仏といわれている。法然上人の御遺骸を少しでも安置したのは、吉水の庵室と、清涼寺と、この西光寺だけである。



増上寺開山西譽聖聽書狀

浄土宗列祖の墨蹟をたずねて

「浄土」購読規定	一部 定価 百円 (送料十二円)	会費一カ年金一、二〇〇円 (送料 不要)	浄土 三月号	昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 昭和四十七年二月二十五日印刷 昭和四十七年三月一日 発行	定価 百円 編集人 宮林 昭彦 発行人 佐藤 密雄 印刷人 関 二三男 印刷所 三幸社印刷所	東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六 発行所 法然上人讃仰会 電話東京二六二局五九四四番 〒一〇二 振替東京八二一八七番
-----------------	-----------------------------	---------------------------------	---------------	---	---	---

大 正 大 学

東京都豊島区西巣鴨3-20-1 TEL(03)918-7311(代)

昭和47年度学生募集

募集人員 200名・2,3年若干名 大学院修40名・博13名
カウンセリング研究所研究生10名
出願期日 第二次 3月1日(水)~3月22日(水)
試験日 第二次 3月24・25日

学 部 専 攻 科

仏教学部 仏教学科—仏教学・梵文学・浄土学・天台学・真言学
文学部 文学科—国文学・米英文学
史学科—日本史学
哲学科—西洋哲学・中国学・宗教学
社会学科—社会学・社会事業
大学院文学研究科—仏教学・国文学・宗教学
カウンセリング 研究生

◎詳細は同学総務部入学案内係へ (〒共 150円)

新刊 柴田六五郎 著 まんだら和尚行状記

昨年12月初版
忽ち再版

附徳本上人小伝・豪潮律師小伝

江戸末期から明治にかけての信仰不毛といわれた時代にまことの宗教者として生き抜いたこれらの人々の記録は今こそ我々に人生の真を語りかける。

価 1,500 円 〒 140 円

南無山房発行・法然上人鑽仰会扱